

広汎性発達障害アスペルガー症候群児への取り組み

○今藤 ひとみ

(医療法人社団 今藤会 今藤歯科医院・人吉市)

【目的】 近年、問診欄にアスペルガー症候群と記入される児童を見かけるようになった。

当院においての3症例の取り組みを報告する。

【症例1】

13歳男児（忘れることができない症状）

歯科医院にて抜歯されたことが忘れられずに入室すると泣いて治療ができない。

永久歯への交換はほとんど終了していることからカリエス・歯肉炎にならないよ

うプラークコントロール・定検。

【症例2】

8歳男児（予期しない何かが起きたときの対応ができない症状）

多言ではあるが治療にも協力的。母親から仮封がはずれたとのことでパニックに

なっているとの一報あり。治療した内容、起こるかもしれない症状、これからの

予定を絵やパネルにして説明し、説明した内容を手紙にして持たせる。

【症例3】

4歳男児（触感のアンバランス）

多動児。接触・抑制されるのを嫌がる児童でカリエスは多いもののサフォライド

で定期的に処置していたがアスペルガー症候群と判定され現在は投薬にて多動は

治まり治療には短時間では協力できるようになってきているが、出来るだけ接触しないよう配慮し、診療前に治療内容も解り易く説明をしている。

【考察】 アスペルガー症候群の生まれつきの症状として出てくるものは多くあるがこれらは

触覚・味覚・聴覚・嗅覚の五感のアンバランスによるもので感覚の偏り方は子ども

により異なる。保護者の方々とのコミュニケーションを密にし、児童への日々を観

察し個々の症状を把握することが大事と思われる。

鉛筆が口腔粘膜に刺入した1例

○河本孝史

(小児歯科愛宕)

【緒言】 小児の口腔粘膜に鉛筆が刺入し骨面まで到達した症例を経験したので報告を行う。

【症例】

10歳4ヶ月の男児

主訴：鉛筆の芯が歯肉に刺さった。

現病歴：学校で鉛筆をくわえていた時、後ろから押され口腔内に刺入した。保健室で問題ないと言われたが、歯肉が黒変しており心配なので来院。

口腔内所見：Hellmanの歯牙年齢ⅢA期で、上顎左側第一乳臼歯頬側歯槽粘膜に鉛筆の芯による黒変部が認められた。

【処置および経過】 口腔粘膜の黒変部は洗浄や清拭では除去できず、粘膜内に黒く残留した状態で治療すると考えられたため、黒変部とその周囲粘膜を一塊にして切除を行った。また、切除後に露出した骨面にも黒変部が認められ、骨を低速ラウンドバーで注水下に削除して完全に除去した。縫合後経過観察を行い、口腔粘膜の治癒は良好であった。

【考察】 本症例は異物の完全除去が行われなかった場合、外傷性色素沈着症に移行したと思われる。さらに、刺入後長い潜伏期間を経て、色調が黒色で急に増大するため悪性黒色腫と鑑別を要するPencil-core granuloma と呼ばれる異物肉芽腫を生ずる可能性もある。

したがって、この様に鉛筆が刺入した場合、異物とならないように早期の対応と完全な除去が重要であると思われる。

参考文献

Pencil-core granulomaの1例 石川めぐみ他:臨皮 1078-1080,2007